第四期育英会入選論文

21世紀の仏教と私の役割り

総合的な仏教研究をめざして

ロンドン大学留学中
名古屋大学大学院　森　雅　秀

物質主義と精神文化

日本人の平均寿命が女性は八十一歳を、男性は七十五歳を越え、いずれも世界一の地位をゆるぎないものにしたという。長寿という古来より人類が求めてきた理想のひとつが、現代では逆に「長寿社会」という言葉とともに、わが国がかかえる社会問題のひとつとして取り扱われ、「長寿必ずしも幸福ならず」という公式のもとで論じられるようになって久しい。そして、その背景として先端医療技術の発達に比べた福祉政策のたちおくれが多くの場合指摘されるが、物質文化を偏重し、精神面の充実を軽視してきた現代文明そのものまで言及されることもしばしばである。

末期がん患者のように、死のみを待つ者への医療であるターミナルケアが論議されるのもこのような文脈においてである。

現代における、このような物質文化と精神文化との間の不均衡は、必ずしも老死といった特

殊な状況だけではなく、生活全般にわたって思いだすことができる。また、日本ばかりではなく、アメリカや多くの西欧諸国がかかえる問題でもある。

これらの国々はいずれも高度に発達した工業先進国であり、近代化、あるいは合理化の名のもとにモノにあふれた豊かな社会を築いてきたのであるが、その一方で、伝統的な価値観を失ってきたことも見逃してはならない。

このような従来の価値観の喪失は国民ひとりひとりのアイデンティティの喪失へとつながり、その反動として、しばしば極端なナショナリズムへと走るものも現れる。また、皮肉なことに、徹底して合理的な精神を追求したこれらの近代国家が、非合理的なものともいえる宗教を決して放逐しなかったことは、宗教ブームと言われるほどに新興宗教が隆盛をほこる現代の日本を見ても明らかである。特に若者を中心として呪術やオカルトといった超自然的なものへのあこがれが強くみられることは、多くのジャーナリズムが報ずるところであり、肥大化した現代社会を前にして、自らのアイデンティティ

を模索する彼らの当然の帰結ともいえよう。

このような状況にあって、精神面において伝統的な価値観の一部を形成してきた仏教にも、おのずと変容が現れる。特に日本仏教の場合、伝統の変容は民衆の信仰と仏教との間の乖離に認められる。

従来、日本仏教は日本人固有の宗教的な感情ともいえる祖先崇拝と結びつくことによって民衆宗教たり得てきたが、この結びつきの度合は近年ますます大きくなり、逆に民衆宗教としての性格を失おうとしている。伝統的な寺院のほとんどが葬式や法事など、死にまつわる儀式にいたずらに荘厳さを求めるばかりで、一般民衆の生活レベルの真摯な信仰との間の溝は深まる一方である。

民衆の仏教における伝統の変容、もしくは喪失は筆者が研究の対象のひとつとしているネパールやチベットの仏教においても顕著である。

ネパール仏教がインドの大乗仏教の伝統を受け継ぎ、独自の仏教を形成してきたことはあまり知られていないが、首都カトマンドゥを中心とするカトマンドゥ盆地には、今なお多くの仏教徒たちが住んでいる。しかし、急速な都市化の波はこのヒマラヤの美しい町にも押し寄せ、周囲の農村や山村からの膨大な人口の流入は、正常な都市としての機能を完全に奪ってしまっている。仏教美術の宝庫であった多くの寺院の荒廃は進む一方であり、また、先進諸国からやってきて土産物を買いあさる観光客の群れは、金銭目当ての盗難にさらに拍車をかけた。

環境の悪化は従来の伝統の喪失に容易に結びつく。寺院に安置するための仏像や、尊像を作ることのできる仏師の数は激減し、伝統的な儀礼を正しく遂行できる僧侶は数えるほどしかいない。後継者不足に悩むネパール仏教が、これから数年の間に大きな変化を遂げることは間違

いないであろう。

現代仏教への正しい認識

一方、国家としての基盤をすでに失ってしまったチベットの場合、この問題はさらに深刻である。

一九五九年のチベット動乱にともない、僧侶を中心に多くのチベット人が国外に亡命し、これが日本を含めた多くのチベット学の発展に大きく貢献したことは確かであるが、信仰の対象としてのチベット仏教を考えた場合、社会との結びつきを断ち切られたという事実は決定的である。

現在ダラムサーラをはじめとするインド各地のキャンプや、アメリカ、ヨーロッパ諸国においてかなりの数のチベット人が従来の伝統の保持につとめているが、異なった環境のもとで動乱以前のチベット本土での僧院生活を再現することはもはや不可能である。

昨今、開放化政策にともない、中国内部でもチベット仏教寺院がいくつか復興されたと聞くが、中国支配下での宗教活動にはおのずと制限があるであろうし、また、中国自身が急速な近代化を進める現在、日本仏教やネパール仏教が通ってきた道をチベット仏教がたどらないとは断言できない。

このような従来の伝統の急激な変容という、現代社会のかかえる大きな問題が仏教にもおよぶなか、われわれ仏教研究者はどのような態度をとるべきであろうか。筆者は安易な復古主義や懐古主義にくみしようとは思わない。

また、極端な仏教改革運動に参加するつもりもない。筆者は日本を含むアジアの現代の仏教を徹底的に「知る」ことを望んでいる。このような態度は、単なる傍観と非難されるかもしれないが、めまぐるしい勢いで社会が変化し、わ

ずかな将来さえ予測することのできない現在、現代の仏教がかかえるさまざまな問題点を知ることなしには、きたるべき将来の仏教の形成に参与することはできないのではないであろうか。

それでは「徹底的に知る」とはいかなる方法でなし得るのか。筆者は、仏教を単なる教理の一体系とはせず、文化の巨大な複合体とみなし、これに対しさまざまな分野からの総合的な研究が必要であると考えている。従来の仏教研究は、経典や論書などにもとづいた文献学的あるいは歴史学的な考察が主流を占めていた。

このような方法は過去のさまざまな仏教を個別的な解明をすることには大きな成果をあげてきたが、専門分野の細分化は一方で各研究者をいわば袋小路に追い込んでしまったのも事実である。

このような現状を打破するためには、従来の

専門領域の枠組みを越えた学際的な仏教研究が必要である。

特に現代の仏教理解には、社会学、人類学、民族学、宗教学といった分野との共同作業が有効であろう。また、総合的な視座において仏教の研究を進めるためには、地域や時代に関するこれまでの枠組みをいったんはずす必要もでてくる。

すなわち、南アジア、あるいは東アジアの宗教としての仏教を、より長い時代の中での文化現象としてとらえる視点が要請されよう。さらに、これまで自明のこととして受け入れられてきた大乗仏教、小乗仏教、あるいはインド仏教、中国仏教といった分類法にも疑問がとなえられるかもしれない。

現代の仏教をとりまく状況は、筆者がこれまで勢力的に研究を進めてきた十一、十二世紀のインドの仏教を想起させる。当時の仏教は、国家の保護をうけて教義の面では著しい発達を遂げたが、その哲学的な高邁さがかえって一般の民衆の離反を招き、それをくいとめるために儀礼や美術などの面でヒンドゥー教との融合をすすめていった。

結局、このことが仏教から独自性を奪い、ちょうどこのころ激しくなってきたイスラム教徒の侵入ともあいまって、自らを生んだインドの地から仏教は姿を消すことになる。当時の仏教徒たちの轍を踏まないためにも、われわれは現代の仏教を理解しなくてはならない。

その一方で、この時代をはじめとする過去の仏教に関しても同様の総合的な研究を行うことは、現代の仏教を知るうえで大きな示唆を与えてくれるであろう。

なぜなら、過去はいつでも偉大な教師なのであるから。